

# 道会 鉄協 鉄道遺産の活用、地域一丸で 本存 日保 全国から鉄道保存関係者70人

日本鉄道保存協会（本部東京）の2018年度研修会が21、22の両日、小坂町を会場に開かれ、総会やシンポジウムなどを通して鉄道遺産の保存と活用を考えた。同町の開催は初、全国から鉄道愛好者や保存団体の関係者ら約70人が参加した。同協会は、全国各地の歴史的鉄道車両や構造物の保存などに携わる57団体、個人20人で組織。結成は1991年で、本県では小坂鉄道保存会（千葉裕之会長）が唯一の会員（2013年加盟）になっている。

各地の持ち回りで年1回開催しており、町セバ



鉄道遺産の保存・活用に意見を交わしたシンポジウム

鉄道遺産を活かしたまちづくりと観光」をテーマに行われたシンポジウムでは、新潟市新津鉄道資料館の水澤喜代志副館長ら4人が、鹿トンネルを活用した観光や地域と協力した鉄道商店街などの取り組みを紹介。

コーディネーターの米山淳一さん（同協会事務局）は「鉄道は、思いの深い人たちのものだった。近年はその価値が見直され、文化財、遺産として守ることが重要となっている」と主張。

鉄道遺産は「保存から活用、使わなければ守ることができない」とし、保存会のみならず、行政や住民など地域が一丸となった取り組みが求められるとした。



小坂レールパークを視察する会員たち

参加者の多くは小坂鉄道レールパークのブルートレインあけほけの宿泊。最終日は同パークや尾去沢鉱山を視察した。

デハ3499号車保存会（埼玉県）の日暮成一代表（44）は「施設が広くて、車両や保線などの維持管理が、とても大変だと感じた」とレールパークの課題を指摘。

埼玉県から参加した千秋太郎さん（21）は「あけほけに乗車したことがなかったのですが宿泊は感動的だった。レールパークは展示内容や車両も抱負で充実していると感じました」と話していた。